

群 教 七	F09 - 01
	平25.251集
	教育相談

学級における課題を主体的に 解決しようとする学級づくり

— 話し合い活動における意見を比較検討するための工夫を中心に —

特別研修員 三宅 賢

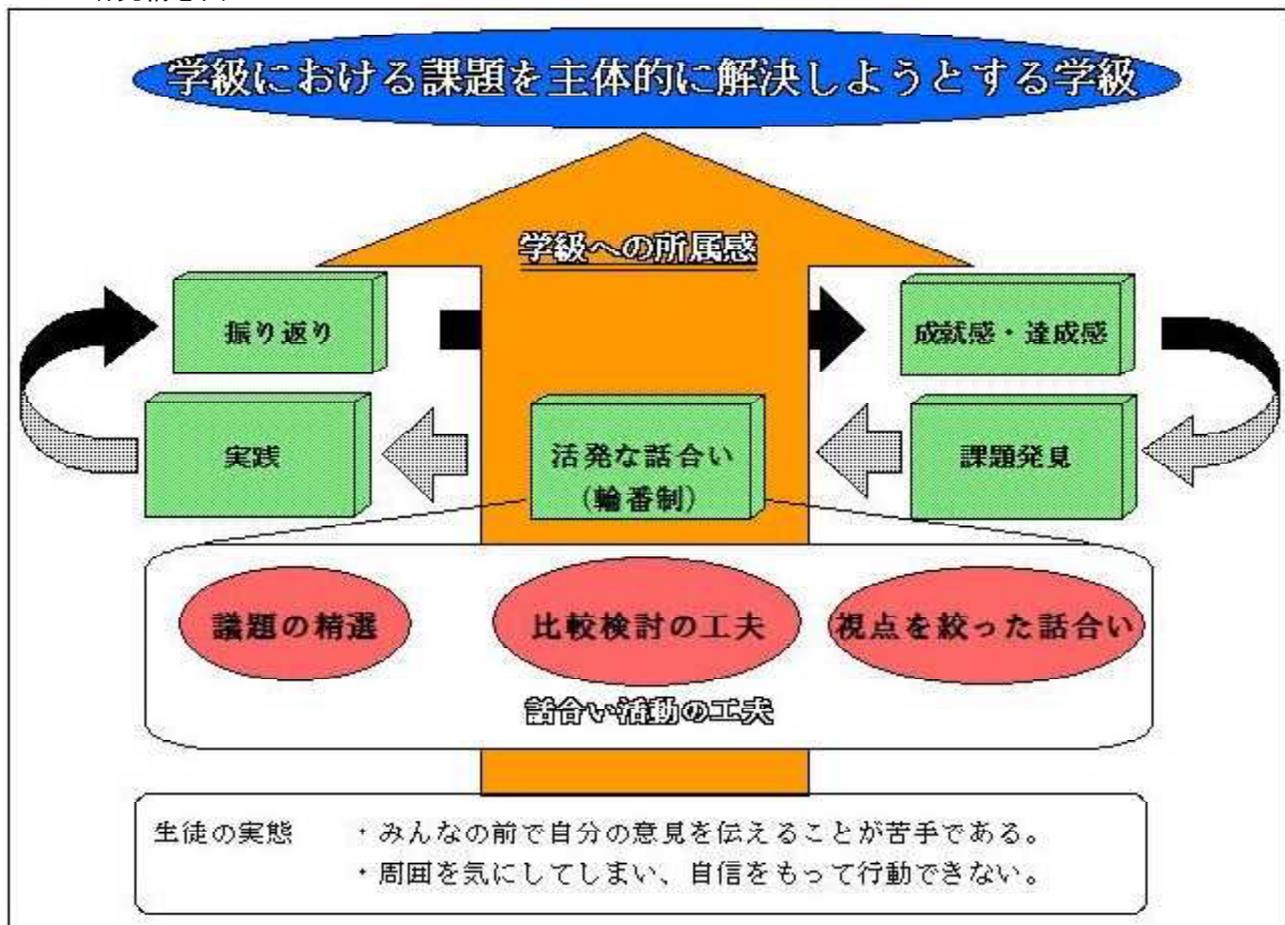
I 主題設定の理由

学校教育の指針（平成25年度）における指導の重点において、「議題に対する集団決定や、題材に対する自己決定ができるような話し合い活動の充実」と述べられているように、生徒一人一人が学級における課題について、自分の考えをもって話し合いに参加し、集団決定したことをもとに、自らすすんで実践しようとする主体的な態度を育てる必要があると考える。

そこで、中学2年生の学級活動における話し合い活動において、次の三つを中心として本研究を行った。一つ目は、生徒一人一人の目的意識の高い議題を設定すること、二つ目は、自分の考えを的確に発言できるよう視点を絞って話し合うこと、三つ目は、理由を含めた意見を発表したり、ホワイトボードを使って意見をまとめたり、比較検討のための工夫をすることである。このことにより、生徒は出された意見の根拠や話し合いの流れが分かるので、活発な話し合いになると考える。また「課題発見」→「活発な話し合い」→「実践」→「振り返り」を繰り返し実践することにより、学級の成長を生徒自ら感じ、学級への所属感が高まり、課題を主体的に解決しようとする学級づくりがすすむと考え、本研究主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手だて

議題「学級対抗レクに向けての取組」〔内容（１）ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決〕において、活発な話し合いになるように以下の点を実践した。

——実践１における研究上の手だて——

- ・ 輪番制の計画委員と、事前の打合せをし、当日の司会進行をスムーズに行えるようにする。
- ・ 各班でホワイトボードを活用して意見を発表し、グループ分けが容易にできるようにする。

生徒は、自分の意見をグループ内で分かりやすく発表できた。司会の生徒の３名も、スムーズに話し合いを進行できたので、活発な話し合いになっていたが、議題の「取組」という言葉が曖昧で「行動」なのか「気持ち」なのか視点を絞って話し合わなかった。このため、意見が広がり過ぎてしまい、比較検討の場面において、意見をグループ分けしたり、まとめたりするのが難しく、生徒が戸惑う結果になった。そこで、議題「サンキューノートをパワーアップしよう」〔内容（１）ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決〕において、実践１の手だてに加えて、次のように改善した。

——実践２における研究上の手だて——

- ・ 一人一人が、議題に対して的確な意見を考えられるように、視点を「行動」に絞った話し合いを行う。
- ・ 理由を含めた意見を発表することで、生徒が意見の根拠を理解した上で、比較検討を行う。

今回の話し合いでは、「行動」に絞って意見を発表できた。また、生徒が話し合いの必要性を感じていた議題だったため、活発な話し合いになった。意見を発表する場面では、理由を含めた発表を行わせたことで、生徒が友達の意見の根拠を理解できた。これにより、生徒が共通理解のもとで、出された意見を比較検討できていたので、グループ分けや意見をまとめることも、司会の生徒を中心に主体的にできた。意見を発表していない生徒も、うなずく場面が多く、話し合いには参加していた。生徒は話し合いで一つ一つの意見を大切にしている、全員が納得のいく話し合いになった。このため、話し合い終了後の成就感も得ることができ、その後、決定したことを意欲的に実践する生徒の姿も見ることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 授業実践を重ねることで、ホワイトボードを活用し、グループ分けや比較検討を効率的に行えるようになった。また、根拠を明確にして意見を述べるなど、主体的に活動できるようになった。
- 意見の比較検討の場面では、一つ一つの意見の長所や短所を出し合い、学級の生徒が納得するまで議論しようという姿勢が身に付いた。
- 輪番制で、生徒全員が計画委員（司会）を分担したため、司会進行や意見をまとめる大変さを、みんなが経験したことで、話し合いにおける無責任な発言はなくなり、建設的な意見が増えた。
- 学級で決まった楽しい実践や学級独自の特色ある実践も生まれ、その楽しさやうれしさを学級全体で共有することを通して、生徒の成就感や学級への所属感も高まった。
- 生徒主体の活動を繰り返す中で、生徒は学級における課題を自分たちだけで改善、解決できるという自信がもてた。これにより、気付いたことは積極的に声をかけ合うなど、主体的に学級の課題を解決しようとする姿が、学校生活や学校行事の様々な場面で見られるようになった。

2 課題

- 話し合い活動の充実を、学年全体が同じ歩調で進めることで、さらなる向上を目指すこと。

3 話し合い活動のさらなる充実に向けて

- 今後は、学級で決定したことの実践に取り組む中で、振り返りカードを活用することを通して、生徒に何が身に付いたのか、何を感じたのかなど、確認や分析ができるようにしたい。

IV 実践及び改善の実際

実践 1

1 議題 「学級対抗レクに向けての取組」

内容 (1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

2 本時について

学級対抗レクとは、各学期に1回行うもので、A組とB組の対抗で球技を行う学年行事である。(図1) 競技種目の決定から、チーム分けやルール作り、そして当日の司会進行まで、すべて生徒が主体的に進めていく。1学期の学級対抗レクとして今回はバスケットボールでの対戦となった。

本議題は、この学級対抗レクに向けて、事前にどんな取組ができるのかを話し合うものである。学級対抗レクに向けての取組を集団決定することや決定した取組を学級の生徒全員で行うことによって、生徒一人一人の学級への所属感と学級対抗レクに対する生徒の意欲を高めることができると考えた。



図1 学級対抗レクの場面

3 授業の実際

話し合いは、司会2名と記録1名の計3名を計画委員として、輪番制で行っている。司会の生徒が議題を発表し、生徒は、配布されたワークシートに、「学級対抗レクに向けてどんな取組ができるか」を記入した。ワークシートは、事前に計画委員と打合せを行い、レクの前・レク当日・レクの後に分けた方が、取組を考えやすいという意見が出たため、その生徒の提案を採用して、ワークシートは三つに場面を分けたものを使うことにした。実際、生徒は具体的にその場面を想定して考え、意見を記入していたので、計画委員の生徒との事前の打合せがとても役に立ったと感じた。

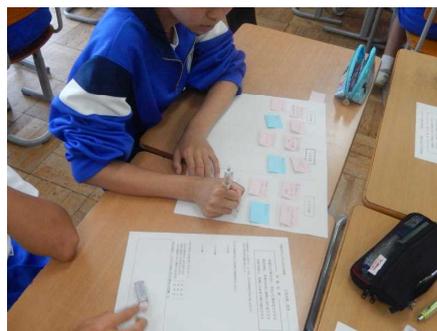


図2 班で付箋を貼っている場面

その後、班になって、一人一人の意見を付箋に書いて、順番に意見を言いながら貼った。(図2) 付箋を使うことで、意見を伝えることが不得意な生徒も、班の中で発表の場面が与えられているので、安心して意見を発表していた。一度貼った付箋は、同じようなものに分類し、それをもとに班の意見をまとめ、ホワイトボードを活用して、順番に発表した。各班から発表された主な意見は、以下のとおりであった。

レクの前	レクの当日	レクの後
<ul style="list-style-type: none">・昼休みに練習する。・作戦を立てる。・気持ちを高める。・相手を分析する。	<ul style="list-style-type: none">・自分の学級を応援する。・全力でプレーする。・あきらめず、がんばる。・円陣を組む。	<ul style="list-style-type: none">・よかったことを伝え合う。・悪口や文句を言わない。・結果にかかわらず、健闘をたたえる。

図3 6つの班から出された意見をまとめたもの

ここで、生徒が話し合いでまとめた内容を確認したところ、「具体的な行動」と「気持ちや心構え」の二種類の意見に分かれていた。これは、「学級対抗レクに向けての取組」というものが曖昧であったので、司会から議題の発表の場面で、学級全体で「具体的な活動」を考えると、共通理解した上で活動を始めるときであった。

司会の生徒も、意見の比較検討に入るとき、意見の幅が広すぎて、どうやってまとめればよいのか戸惑ってしまっていたので、今回は「具体的な行動」で、よい案を見付けようということ全体を確認し、比較検討に入った。(図4)



図4 各班から出された意見の比較検討に入る場面

(1) レクの前について

まず、「気持ちを高めるとは、どんなことをするのか？」との生徒の質問に、意見を出した班では、具体的な行動を考えていなかったため、「気持ちを高める」という案は却下された。次に、「作戦」か「練習」かという議論になったが、「作戦を立てるのは人数も時間もそれほど必要ない」との意見に、多くの生徒が賛同し、「苦手な子がいるからみんなで練習した方がいいよ！」との発言が何人もの生徒から出てきて、「昼休みに練習しよう」ということに決定した。

(2) レクの当日について

レクの当日の案は、よい意見がいくつか出ていたので、生徒は決めきれない様子だった。そこで、司会の生徒の一つに絞らなくてよいことを全体に伝えてもらった。すると、すぐに「気合いを入れるために円陣を組むのはよい」や「応援をすれば、盛り上がる」といった意見が出た。また、「全力でプレーすることや、あきらめずにがんばる」という意見は、具体的な行動ではないと思うとの意見が出た。それに対して「全力でやると決めれば、みんなやると思う」という意見も出された。少しの沈黙の後、一人の生徒が「全力でやっているかどうかは、本人以外分らないと思う」と言ったら「確かに！」と共感し、取組としては相応しくないということになった。これ以上まとめられないので多数決により、「円陣を組む」「応援する」に決定した。(図6)

(3) レクの後について

「文句を言わない。」というのは「よかったことを伝え合う。」ことだという意見と、「健闘をたたえる。」ことも同じことなので、まとめた方がよいという意見により、三つの意見を一つにまとめることになった。これにより、「お互いのよかったプレーを伝える。」ことに決定した。

レクの前	学級全員で、昼休みに練習をする。
レクの当日	円陣を組む。自分の学級を応援する。
レクの後	お互いによかったプレーを伝える。

図5 話し合いで決定したこと



図6 円陣を組んでいる場面

4 考察

学級対抗レクに向けて気持ちが高まっていて、生徒が真剣に議題について考えることができた。事前の打合せの効果が表れ、教師が助言する場面も少なく、司会の生徒が主体的に進行できた。ホワイトボードの活用も、意見を消すことなく、グループ分けができるので、各班の意見を大切にしている姿が見られた。また、付箋を貼る活動により、人前で発表するのが苦手な生徒も、自分の意見をグループ内で発表できた。課題として、学級対抗レクに向けた「取組」というものが抽象的だったので、「行動」に視点を絞り、学級全体で共通理解した上で、議題について考え始めることが必要だった。

実践 2

1 議題 「サンキューノートのパワーアップしよう」

内容 (1) ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

2 本時について

サンキューノートとは、人権集中学習期間に、「いじめのないクラスにするために」という議題で話し合ったときに、生徒の提案で、学級で実践することが決定した取組である。一人一人の生徒がサンキューノートを持っており、毎週水曜日の帰りの会で、ランダムに配って、自分に配られた生徒のノートにありがとうのメッセージや温かい言葉を送るというものである。(図1) 5月から続けているサンキューノートの課題の解決策について話し合い、お互いの意見の「折り合い」をつけながら集団決定すること



図1 サンキューノート

や決定事項をみんなで協力して実践することによって、生徒一人一人の学級への所属感や自己有用感を得られると考えた。また、活発な話し合いによりサンキューノートのパワーアップできたという充実感や達成感があれば、さらに次の活動に向けての意欲や課題に気付く力が生まれ、主体的な態度につながる考えた。

3 授業の実際

話し合いは、司会2名と記録1名が輪番制で行っており、今回の記録の生徒が、事前に手書きで作成したプリント(図2)を使い、議題について考えた。記録の生徒の手書きのプリントにより、課題を解決しようとする意欲を高めることができた。また、以前からサンキューノートに課題があると感じていた生徒も多く、真剣に考えていた。

○ 課題1 同じ人のノートが回ってくるので、まだ書いたことのない人のノートが回るようにしたい!

○ 課題2 書く時間が短くて、書くことが思い浮かばない。

課題1について、生徒が個人で改善策を考えた後、6つの班になって話し合い、各班でまとめた意見をホワイトボードに書き、理由とともに発表した。(図4)

各班の意見をまとめると、次のとおりである。

- a サンキューノートの順番を作って回す。
- b 出席番号順に回す。
- c 誕生日順に回す。
- d 対戦表を作って渡す。
- e 同じ人に当たったら交換

図3 課題1の改善策として各班から出された意見

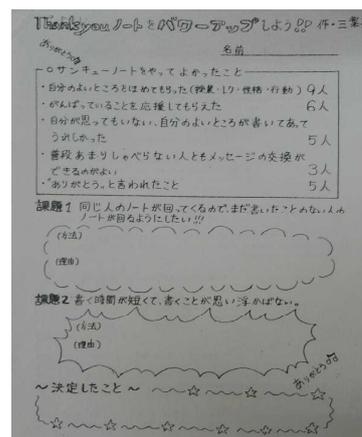


図2 手書きのプリント



図4 ホワイトボードを使って 班の意見を発表している様子

提案理由が、全員に行き渡るということであつたが、eについては必ずしも全員行き渡るとは言えないという理由から外れた。次にa~cについては、すべて「順番」なので、a~c「順番」かd「対戦表の二つに絞られた。話し合いの結果、対戦表に従って一対一で交換するより、順番で回す方が誰が自分のを書いているか分からなくてワクワクするという理由により、全会一致で「順番」となった。

次に「いつサンキューノート配布するか」の議論で意見が二つに分かれた。

a 帰りの会の直前に配布する	b その日の朝または、数日前に配布する。
○直前まで書く人が分からない方がドキドキして楽しい。 ×すぐに書くことが思い浮かばない場合がある。	○書く人が事前に分かっていた方が、よく観察して書けるので、書きやすい。 ×早く配ってしまうとノートを忘れたり、なくしたりする可能性がある。

図5 比較検討の際に、生徒が出したaの意見とbの意見の長所○と短所×

aとbの意見のよさや課題を再度確認し、司会の生徒が多数決をとったが、結果は10対10となり、議論が止まってしまった。(図6)すると、ある生徒の「前もって配布すれば、課題2の書く時間が短くて、書くことが思い浮かばないということも解決できると思います」との意見に、たくさんの生徒がうなずき、bの方へ生徒の気持ちが傾いた。bの課題である忘れたり、なくしたりしない方法としてノートを事前に配布するのではなく、「予定表」(図8)を作ることに決定した。



図6 意見を比較検討している場面

課題1と課題2の両方を解決できる新しいサンキューノートの取組が以下に決定した。

- ・ 予定表に従って、水曜日の帰りの会でサンキューノートを配布する。
- ・ 一週間前には、次に書く相手が予定表に書き加えられるので、必ず確認する。

図7 話し合いで決定したこと

4 考察

今回の話し合いは、まず議題が生徒自身が課題だと感じていたものだったこと、次に理由を含めた意見を述べることで他の生徒もその意見のよさを理解できたこと、この2点によって生徒主体の活動になった。また、ホワイトボードの活用により、黒板の内容を消すことなく、ホワイトボードの移動により、効率的に板書でき、生徒も話し合いの経過が分かった。特に、比較検討の場面で、生徒は、一つ一つの意見のよさを理解でき、絞り込みがスムーズにできた。意見を発表しなかった生徒もうなずいている場面がいくつもあり、多くの生徒は、議論後の達成感を得ることができていたと考える。



図8 新たに導入した予定表

話し合いが行われた次の週から新たに始めたサンキューノートは、以前から気になっていた課題が解決され、スムーズに取り組めるようになったことと、自分たちでよりよいものに改善できたという達成感により、生徒は今まで以上に意欲的にサンキューノートに友達のよいところを記入していた。

今後も継続したいことは、次の二つである。

- 話し合いに向けて、休み時間を活用し、計画委員と話し合いの進め方について事前の計画を立てたい。
- 話し合い活動では、理由を含めた意見を発表することを生徒に定着させ、生徒全員がその意見のよさを理解した上で活発な話し合いが展開できるようにしたい。